

金沢

かわら版

尾張町しこせ通りで

1

けは、少しは休ませてもらうも
 贈が当たるわけやなしと思っ
 た」。祖母の話である。

って、ボチボチ店も閉まりだす
 んや。大みそかからこっち、働
 き詰めやっだし、これから初荷
 が動き出すまでの正月三日だ

一昔前までは、まとまった休
 みは益と正月しかなく、その時
 にゆっくり休むために年に二回
 の集金を、「一所懸命」にしたも
 のだった。

石野 環一(いしの・しゅう
 いち)一九四八年、金沢市尾張
 町生まれ。尾張町商店街振興組
 合専務理事、尾張町若手会元会
 長。宝生流能楽の免許取得。

何しろ、集金の集まり具合で
 休みの時にもらえる小遣いの額
 が決まるので集める者も必死。
 かたや、集金される者もこの時
 をうまくかわせば、半年は支払
 いが先に延びるのだから必死。
 それだけに、やり甲斐(がい)
 もあった。

働くことと休むことの大事な
 接点のお正月は、またご主人に
 認められるチャンスでもあっ
 た。

初売り

真っ暗な中に、町内
 の店の提灯(ちようち
 ん)という提灯に二斉
 に明かりがとまり、思
 い思いのはんてんを着
 た店員さんの掛け声が、にぎや
 かに聞こえては来ず。

持ち帰ったようにととと騒り
 出す人影を照らす明かりが、蛍
 光灯の青白い光とは違う、味わ
 いのあるまぶしさだったろう。
 あかあかとして、ちようと賑日
 の夜店の風情か。

「千ごものころに戻って、何
 や体が飛び上がりそろなほど寒
 しゅうて、真夜中の寒さを忘れ
 た。ただもうよその店に負けた
 らいかん思えて、つい精いっぱい
 の掛け声を出してのことがから
 からになっしてしまっ」

温かくて幸せそうなお客さん
 は、次々と目の前を通り過ぎて
 行く。

「夜が白みかけるころになる
 と、さすがに人もまばらにな



加賀提灯 客を呼び込む商家の提灯は初売りから欠かせ
 ない。八方丸くと、圓には園(くじ)の字を当てている